

連載

# 新・種を蔭く人

〈私説〉世紀の大プロジェクト ～豊川用水～

高崎 哲郎 (作家)

## 第1回「先覚者—苦難の長い道—」

ステージ じゅいちろう  
〈舞台～近藤寿市郎、国会で繰り返し訴えるが・・・～〉

「立憲政友会近藤寿市郎君の『豊橋地方国営開墾建議案』に関する提案理由の説明を認めます。近藤寿市郎君！」

立憲政友会系の衆議院議長秋田清(徳島県選出)は、しわがれ声を張り上げ議場を見渡した。議長に名指しされた近藤は、演説の草稿を小脇に抱えて小柄な体を演説台へと向かわせた。

昭和9年(1934年)3月半ば、例年にない長い冬はようやく峠を越えた。だが帝国議会第65議会は会期末を迎えて、政府与党立憲政友会と野党立憲民政党との法案審議をめぐる駆け引きは熾烈を極めた。時局は、昭和6年の満州事変勃発以降、中国との「15年戦争」という泥沼戦線の渦中にあった。翌7年には海軍青年将校らによる5・15事件が突発し首相犬養毅が射殺された。

国家は非常事態に突入していた。帝国議会では国体明徴論が声高に論じられていた。斎藤実内閣は立憲政友会系の内閣で、総理大臣斎藤実は海軍将校の出身であり、5・15事件の後、昭和7年5月に挙国一致内閣の首相に指名された。だが挙国一致内閣とは名ばかりだった。(斎藤はその後内大臣に就任するが、2・26事件で反乱軍に殺害される)。

3日前のことである。緊迫した国内や国会の情勢の中で、愛知県豊橋選出の衆議院議員近藤寿市郎は、国会内で本会議の運営を協議する与野党の議院運営委員会理事会に直接出向いて訴えた。

「私はこれまで2度にわたって『豊橋地方国営開墾建議案』(正確には『豊橋市外3郡(渥美、八名、宝飯)内原野国営開墾に関する建議案』)を衆議院本会議において提案し、その都度建議案は満場一致で通過し支持を得ています。しかしながら、政府当局は本会議での全面的な支持を無視するかのよう、予算措置も含めて何の対策も講じていません。国会軽視であり、怒髪天を衝く、とは正にこのことです。時局が準戦時体制であること、農山村対策に予算を配分しにくい情勢は十分理解します。ですが東三河地方は毎年のように大干ばつに襲われています。我々は毎年干ばつという敵と戦っているのです。私は干ばつと凶作に苦しむ50万の農民を救わなければならないのです。



近藤寿市郎(晩年)



3度目の正直です。今回も本会議で建議案を提案させていただきたい」

近藤は心中の憤りを抑えながら訴えた。与野党の議員運家委員会理事は、「干ばつ対策は人民救済の大問題である。いち東三河地方だけの問題ではない」として与野党の立場を越えて近藤の訴えを認めた。



登壇した近藤は演説草稿を指先で開くと一礼した。

「私は昨年と同じ時期に同じ演説をいたしました。一昨年も行いました。しかも、いずれも議員諸君のご理解を得て満場一致で賛同を得たのであります。ところがです。政府は一向に本格的対策を取ろうといたしません。昨年申上げた理由の他になお本年は悲しむべき点があります。それを申上げてみたいと思うのであります。愛知県東三河を貫通して豊川という川が流れております。さほど距離の長い川ではありませんが、三河三大河の一つであります。この川の上流に堰堤(ダム)を築いて大貯水池を設ければこの灌漑用水によって農民が救われるという長年の悲願達成が本案の主眼であります。水源池のダム湖がどうしても欲しいのです。

豊橋市の高師原、天伯原、渥美郡細谷原、老津原、百々原、黒川原、比留輪原、亀山原、保美原など100町歩も200町歩も草や小松の生えている原が沢山あります。(1町歩は約100アール弱)。また宝飯郡におきましても何100町歩、何1000町歩という原があります。その他八名郡の原野並びに渥美半島の海面に於いては田原湾、福江湾などを埋め立てまして、これらの開墾開拓を致しますれば1万町歩以上の耕地が出来るのであります。1万町歩も得られる耕地が、何故今日まで開墾せられなかったか。この辺の土地は一帯が酸性土壌でありまして、禿山で俗に『不良土』と称し痩せ地でありますから、開墾致しましても収穫物は価の最も安いサツマイモが大根くらいしか獲れないのです」

「広大なる土地を有しておりますも何の役にも立ちません。それかと申して植林にも適しませずご承知の通り小松原で棄ててあったのであります。ところが、この酸性土壌は水が掛りますれば土地そのものが水のために腐敗しまして痩せ地が肥えた土地になるのであります。然るに、あの辺は地下水も利きませず、それかという豊川の河水は1200町歩の神野新田用水

と松原用水に取られました外は、水力発電やイカダ流しの便に利用され、それ以上灌漑用水に取るべき余地がないのです。そこで、山手の高台に大堰堤を築き一大貯水池を設ける外ないのであります。こうした大規模灌漑はかつて私がオランダ領東印度(今日のインドネシア)など視察致しました時見て参りました。あの国では高い山にでも灌漑用水を鉄管で以てあげる様になっております」

近藤はハンカチで額の汗をぬぐった。

「オランダは非常に水利に長けた処であります、これらを見て参りまして東三河地方もどうかああいう風にしたならばよかろうという処から、この案を立てたのであります。ところが昨年はあの大豊作であったにも拘らず、渥美郡外3、4郡即ち東三河1市5郡に亘りまして何100町歩というものが水不足のため植付不能に及び、また植付けても枯れ死して実るまでにはとても至らなかったのであります。税務署即ち大蔵省に向かって租税の減免を願っている最中でありまして。隣県とか同じ県内でも尾張地方は肥沃の土地で水の常にあり余る処、用水の利く処は平年より何倍の収穫があったという昨年のあの豊作にこの地方は唯今申上げた状態で、何100町歩というものが収穫皆無に終わったのであります。農民が米を買って食わねば生活が出来ないという次第で、農村疲弊は非常などん底に落ちている、その上にこの様な悲惨な状態になっているのであります」

近藤は一層声を張り上げた。議場は静まりヤジひとつ飛ばなかった。

「かくの如き開墾に対する主要工事を政府は数年前から調査はしておられるけれども、早く工を起こして進んでおられましたならば昨年のような悲惨をみることはなかったであろうということが、ここになお一つ急速を要する理由が加わってきたのであります。政府におかれまして、かつて田中(義一)内閣時代にこれらの開墾につきまして大規模国営開墾として調査され、引き続き調査費も予算に計上されておりましたけれども、これがかの浜口(雄幸)内閣の緊縮政策のもとで縮められました。ために一時はこの国営開墾の調査費は一文もなく、項目まで削られそうでありました。これは愛知県ばかりでなく京都府および福島県あるいは鹿児島、岩手など各県にかような処がありましたので、猛烈に運動をいたしました。その結果、どうやら、こうやら予算の項目だけ存して、その後若槻(礼次郎)内閣になり、

## 第1回 「先覚者—苦難の長い道—」

ようやく有望なるものであると認められました。だんだん調査をするようになったのではありますが、容易に進みません。陳情、嘆願を繰り返している側の立場から申しますれば、皮肉なことを申上げるようですが、政府は調査調査に名を借り、ただやるやるとばかり言っても出来ないのでは、ただいま申し上げた通り悲惨な状態に陥るのであります。財政上の御都合もあるでしょうが、急速にこの主要工事を起工せられ、そうして国営をもって開墾をいたしますれば、痩せた荒地が肥えた土地に変貌する」

「愛知県の同じ三河にあります安城<sup>あんじょう</sup>という、『日本のデンマーク』と称せられている処の土地も、やはりこの通りの土地でありました。ですが、あの明治用水、枝下用水<sup>したれ</sup>という矢作川<sup>やはぎ</sup>の用水が出来たから『日本のデンマーク』と言われるようになったのであります。これに鑑<sup>かんが</sup>みましても、この豊橋市ほか3郡にわたる土地の開墾及び開拓をいたしますれば、優に1万町歩以上の耕地が得られるのであります。これは必ずしも米を獲らなければならないという意味ではないのであります。コメがあり余るならば蔬菜<sup>そさい</sup>といたしましてもよろしい。気候の良いことは実に天然の温室とも称すべきで、東京、大阪、名古屋地方へ12月中にお正月用の食膳<sup>あひ</sup>にのせるサヤエンドウを出す農家は、今申し上げました渥美半島の如き所であります。こういう土地を開墾いたしました、有利有益にいたしますことが、即ち今日の農村振興の一端となり、また国益ともなり、人口増殖に対する食糧問題解決の一端ともなります。この工事は一日も早く起こされんことを希望するがゆえに、この案を提出した次第であります。決して一地方の問題ではないと存じますから、満場を持って可決相なるようご尽力のほど、ひとえにお願いする次第であります」(衆議院議会議事録による。一部修正した)。与党席を中心に拍手がわき起こった。演説を終えた近藤は内心つぶやいた。「愚公、山を動かす」。3度目の訴えも満場一致で衆議院を通過した。だが政府当局は建設工事に向けた予算を組もうとしなかった。翌10年3月、近藤は4度目の訴えを国会本会議で行った。同じ主旨の建議案を本会議で4年続けて訴えるのは異例中の異例であった。だが声涙ともに下る演説も政府を動かさなかった。戦時体制に猛進する国家は軍事費の増大を続け、社会資本整備のための公共事業予算には一切配慮を払わなかった。帝国日本は戦争への坂道を転がり落ちるのである。(以下、『豊川用水史』、近藤寿市郎自叙伝『今昔物語』、『愛知県史』、『豊橋市

史』、愛知県・水資源機構・各土地改良区の関連資料を参考にし、一部引用する)。

## 「日本一の『農業王国』」

「愛知県の形は、太平洋に向かってじっと獲物を待ち構えている大蟹のようで、その怪異な様相は神話的とさえ思われる。大蟹のたくましい二本の前肢に当たるのが、東側に突き出た渥美半島と、西側の知多半島だ」(野田宇太郎『文学散歩』第12巻)。今日、その突きでた西側の知多半島に愛知用水が走り、東側の渥美半島に豊川用水が走る。戦後日本の復興期を代表する2つの国家一大プロジェクトである。(愛知用水については拙書『水の思想 土の理想』(鹿島出版会)参照)。

古来、東西の2つの半島とも干ばつ常襲地帯であった。灌漑用の溜池が点在する荒れ野であった。それが日本を代表する「農業王国」に大きく変貌したのである。その原動力が2つの人工大動脈・用水である。愛知用水は昭和36年(1961年)9月に通水式が行われた。本年は50周年・半世紀の記念すべき年となる。今回は渥美半島を潤す豊川用水の〈誕生の秘話〉



現在の豊川用水・愛知用水の概要図



に迫る。同用水は昭和 43 年 5 月に完成した。本年度で 43 年目を迎える。



豊川用水に潤う田原市や豊橋市などの「農業王国」ぶりを数字で確認したい。

### ① 市町村別の農業産出額(全国順位)

平成 17 年：1 位・田原市 779 億円、5 位・豊橋市 495 億円。

平成 18 年：1 位・田原市 724 億円、6 位・豊橋市 474 億円。

### ② 主要品目別農業産出額全国順位(平成 18 年)

#### <露地野菜>

キャベツ=田原市(3 位)。ブロッコリー=田原市(2 位)。

#### <施設野菜>

トマト=田原市(3 位)、豊橋市(4 位)、豊川市(15 位)。

おおぼ=豊橋市(1 位)、田原市(5 位)、旧御津町・現豊川市(7 位)。

メロン=田原市(7 位)。

さやえんどう=豊橋市(3 位)、田原市(7 位)。

#### <果樹>

みかん=蒲郡市(6 位)。

#### <花卉>

きく=田原市(1 位)、豊川市(4 位)。ばら=田原市(1 位)、豊橋市(7 位)。

### ③ 渥美半島の農業

#### 1. 市町別農家 1 戸当たり生産農業所得(平成 15 年)

豊橋市(310 万円)、田原市(521 万円)。

愛知県平均(138 万円)、全国平均(124 万円)。

田原市は全国平均の実に 4 倍強である。

豊橋市、田原市ともに平成 20 年以降さらに所得を増やしていると考えられる。

#### 2. 農業産出額の推移

昭和 40 年=(豊川用水通水前)=162 億 5900 万円

同 43 年=(豊川用水通水)=376 億 4000 万円

同 45 年=(通水 2 年後)=405 億 6100 万円

同 50 年=909 億 900 万円

同 55 年=1184 億 6000 万円(この年以降 1000 億円を下回る年はない)

同 60 年=1062 億 3100 万円

平成 7 年=1366 億 8100 円

平成 17 年=1274 億 6000 万円

平成 18 年=1591 億 1000 万円(過去最高)

用水通水時の 4.2 倍に達している。驚異的成長と言わざるを得ない。名実ともに日本一の「農業王国」である。

### ④ 水道用水

給水人口でみる。昭和 43 年度(通水年)は 35 万人で、平成 18 年度は 74 万人、約 2 倍の増加である。

### ⑤ 工業用水

工業用水は主に工業用品の洗浄用や冷却用として使われる。製造品出荷額でみる。昭和 43 年度(通水年)は 3483 億円で、平成 18 年度は 6 兆 3913 億円、18.3 倍の大幅な増加ぶりである。

<参考> 豊川用水(水源豊川)と愛知用水(水源木曾川)を比較してみよう。

#### ・水路の総延長

(1) 豊川用水 111.7km (東部幹線 75.7km、西部幹線 36.0km)、その他に導水路 34.5km。

(2) 愛知用水 113 km

#### ・用水により水の供給を受けている農家数

(1) 豊川用水 29,476 人(豊川総合用水土地改良区 22,921 人、牟呂土地改良区 2,131 人、松原用水土地改良区 2,138 人、湖西用水土地改良区 2,186 人)

受益面積：17,500 ha

(2) 愛知用水 32,000 人(※この人数は平成 13 年の愛知用水土地改良区のみで可児、入鹿土地改良区は含まれていない。)

受益面積：13,500 ha

いずれの数字も全国の用水や土地改良区の中で突出している。豊川用水は愛知用水に携わった技術者を投入し、大型機材の導入など、国産技術で独自にプロジェクトを推進したのである。「愛知県にとって、さらに幸いであったことは、愛知用水公団に結集した技術陣が、今度はそっくり豊川用水に投入されたことでした」(『桑原幹根 愛知県知事回顧録』)。

## 第1回 「先覚者—苦難の長い道—」

### 「中央構造線を流れる豊川」

豊川は日本列島の太平洋側のほぼ中央部に位置する。集水域は愛知県内にすっぽりと収まり、全長は約77キロである。全国70位で大河とは言えないが、国土交通省が直接管理する一級河川である。豊川の上流域は二大支流に分かれている。中央構造線に沿って北東から南西方向にほぼ直線的に流れ下る宇連川と、中央構造線の北(内帯)側で古い火山活動による噴火と陥没によってできた設楽盆地の西半分の水を集めて南下する寒狭川である。二つの川は戦国時代の古戦場で知られる長篠地点(新城市)で合流する。二つの支流が合流した後、豊川は渓谷を刻んで流下し、新城市街地南側を下った地域から扇状地を形成して、狭い沖積平野を蛇行しつつ渥美湾へと注ぐ。豊川の集水域は、愛知県東部の静岡県境を東限とし、北東部は天竜川集水域に、西北部は矢作川集水域に接し、新城市石田地点上流の集水面積は約545平方キロメートル(豊川集水域では約724平方キロメートル)である。

豊川の特徴の一つに流量の季節変動が大きいことがある。この川では洪水流量が著しく多い反面、渇水流量は極めて少ない。年間の最大流量の最小流量に対する比が河況係数である。これを日本の主要な河川と比較してみると、豊川は最大流量が3633立方メートルに対して最小流量が実に0.4立方メートルしかなく、河況係数は8073で全国1位である。2位は阿

武隈川で5469であり群を抜いている。雨季と乾季の差が甚だしく、冬場の降雨に恵まれないことを物語っている(『豊川用水史』参考)。渥美半島も冬場の降雨が少なく風が強い。

源流部の三河山地の標高は約700メートルないし1100メートルの範囲にある。集水域の東側は標高300メートルないし700メートルの弓張山脈が走り、集水域の北側は標高1000メートルの山地が立ちはだかる。南側は三河湾と渥美半島の低地を経て、遠州灘の外洋へと開かれた地形となっている。従って台風などによる水蒸気を含んだ南風が吹きつけた場合に大雨となる場合が多い。平年の降雨量は上流域山地においてはほぼ2300ミリ程度で、平地の1700ミリ程度に比べて多い。石田地点上流の集水域に降った雨のうち、豊川に流出してくる水量は、約10億立方メートルで、この水が流域に住む住民の命を育んでいる。

### 「先駆者近藤寿市郎」

豊川用水を語る時、「行動の人」近藤寿市郎(1870—1960)の生涯をまず最初に取り上げるのが礼儀である。近藤寿市郎は、明治3年(1870年)4月15日、渥美郡高松村(現田原市赤羽根町)の旧家近藤直右衛門家の長男として生まれた。(今日、実家の建物は取り払われ、広い敷地は公園に接して整備されている)。先祖は吉田藩剣道指南役であったが、吉田藩が滅びたため浪人となり渥美郡の荒地に落ち込んで帰農し、後に庄屋になった。寿市郎は第16代目である。

彼は小学校の成績が「2番より下ったことはなかった」(『今昔物語』)。数学と書画がいつも満点であった。明治17年、小学校高等科を卒業した。彼は明朗で何事にも前向きに取り組む性格であり、同23年、若くして高松村書記、続いて収入役、助役を歴任して、行政を知り政治家の道を歩んだ。明治23年、国会が開設されると尊敬する郷党の先輩村松愛蔵を慕って自由党に入党し、のち東三支部評議員、次いで幹事となった。政治的闘争心が旺盛で、明治37年から2年間豊橋で実業派の新聞「新朝報」の社長として経営にあたった。

明治39年8月1日、豊橋に市制が施行され初代市長には実業派と対立していた同志派のリーダー大口喜六が就任した。



天竜・豊川・矢作川水系(昭和50年当時、『豊川用水史』より)



## 「インドネシアで構想を得る」

寿市郎は、大正10年(1921年)7月から12月にかけて5か月間、シンガポール、マレーシア、インドネシア方面の海外視察旅行に出かけた。彼は50歳を過ぎていた。政争に倦んで海外への旅を思い立ったのである。このとき、オランダ領インドネシアの灌漑用水にヒントを得て、後に鳳来寺山脈の溪谷にダムを築造し、大貯水池を造るという発想が生まれた。豊川用水の原点である。近藤の自伝『今昔物語』から引用しよう。(一部訂正し、適宜句読点を入れた)。

**豊橋港修築の構想生まる：**「(大正10年)9月8日の早朝からスラバヤ(ジャワ島)自慢の築港を見せてもらった。予算はこの時代1億円で10カ年継続事業であるが、既に6カ年を経過しているのを見た。このやり方を見て豊橋港くらい何でもない。1日も早く豊橋港を修築し、梅田川を開削して浜名湖へ運河を開き、浜名湖より堀江の運河を拡張して浜松に通じること考えたのである。とにかくジャワ島のスラバヤではなく、世界のスラバヤ港だと思った」

**さすが和蘭領水利事業完備：**「それから水利事業だが、昔から世界で水利にたけている国はオランダで、ジャワは蘭領だからその施設がなかなか振っている。まずスラバヤの市中を貫流するマス川を見た。この川は急流であるからところどころにセキ止めがしてあって普通なら田舟も通わぬ所であるが、このセキ止めの所に大規模な官設の船渠があって5、60トンの船が



オランダ東インド会社の旧社屋(現在、インドネシア・ジャカルタ市内)



近藤寿市郎翁生家跡(田原市赤羽根町)



大口喜六(豊橋市初代市長)

このとき、寿市郎は実業派の傘下団体として市民会を組織しており、市制施行問題では時期尚早論を展開していた。しかし、市制施行直後に行われた市会議員選選挙に敗れ、「近藤の市民会は市民会ではなくて死眠会だ」などと皮肉られた。寿市郎は、それでも実業派と通じながら大口市長反対派をもって任じていた。寿市郎の公職歴は、明治36年渥美郡会議員(以下2回当選)、44年愛知県会議員(同4回)、昭和4年(1929年)衆議院議員、11年豊橋市会議員、14年同市助役、16年同市市長というように多彩を極めた。衆議院議員経験者が市議会議員に鞍替えするのは異例である。

渥美出身の近藤寿市郎は、水不足で悩む農民の姿が脳裏に焼きつき、対応策が常に意識の底にあった。豊川の利用を幾たびか考えたが、すでに牟呂用水や松原用水ができており、新しく水源を求めることは無理であった。

「(近藤は)我国の人口増殖に対し産児制限も唱えられるが、移民政策と食糧増産計画に俟つのほかに、食糧増産は開墾干拓土地改良、灌漑用水等であるということを持論としていた。ところが渥美郡の如きは年々干害をこうむり、農民が困窮しつつあるを慮ると同時に、由来東三地方は灌漑に乏しく東三河を貫通しつつある豊川はある。だが、この川の水量は神野新田用水と松原用水、水力電気発電所、豊橋市の上水道、筏流し等に使用し、これ以上灌漑用水に取るべき余地なきにより、地下水を利用せんと日本鑿泉商会の技師を聘し調査せしめた。が、適当なる水層はなく、よって天水(雨水)に俟つの他なく、県の補助を得て各町村に溜池築造を勧めるしかなかった」(『今昔物語』の「豊川農業水利事業起源」)。一大転機が訪れる。

## 第1回 「先覚者—苦難の長い道—」

4、5艘くらいずつ上がったたり下ったりするようになっている。かくの如き工事が所々に施設してある。これを見ると豊川の水利などは少なくとも4、50トン積みの船を大野町の辺まで通わせるのは雑作のないことであると思われた。またジャワ島内における耕地の灌漑水利工事としても何千フィート(1フィートは約30センチ)とある山の中腹は勿論、絶頂まで鉄管でスイッチ一つ押せば水が上がるということになっておる。二等国のオランダが一植民地へ施設する築港とか水利とかの工事でさえこれである。いわんや一等国となった日本国で、わずか豊川くらいな改修や水利をするのに容易に手をつけないということは実に情ない次第である。水利工事ばかりでなく道路やその他においても遺憾なく開けておる」

豊川用水への構想生：「この汽車は急行でなかなか早い。パンジャル付近に行くとなんとなく空気も変わってきて風もすずしくなってきた。段々山へ登るので山の中腹をウネリウネリして進行する。山と山の間に見える水田は遺憾なく開けている。谷川の水利は高い赤い山の頂上まで鉄管にて取り、傾斜面の山腹は段を刻んで棚田をなし、ジャワの農耕は実に水利がたけていて至れり尽くせりで、僕はこれを見て鳳来山山脈に堰堤を築き大貯水池を設け豊川に落し渥美郡を始め東三河の灌漑用水を作るべきヒントを起こしたのである。バンドンは海拔200フィート以上あって非常に暮しよい処で、この地方も農業は大いに開けている。灌漑用水はここも鉄管で山の頂上まで取ってある」

### 「実現の道、遠のく」

帰国後、近藤は「鳳来山にダムを築き大貯水池を設け豊川に落し渥美郡を始め東三河地方の灌漑用水を作るべきだ」と県議会に提唱した。だが「狂人のたわごと」だと<sup>しが</sup>歯牙にもかけられず一笑に付された。これに加えて、豊橋港の修築整備と豊橋・浜松を結ぶ<sup>こんじゅう</sup>運河開削の三大事業は「近寿(愛称)の三大ホラ」とけなされた。

彼は屈しなかった。昭和2年(1927年)の県議会で再び用水の必要性を力説した際に、農林省が大規模開墾事業調査を

進めるなかで注目され、昭和5年に農林省が発表した大規模開墾計画に盛り込まれた。後の豊川用水計画の基礎が出来上がったのである。

県会議員から衆議院議員になった寿市郎は、国にも繰り返して訴え、豊川用水は国営事業として実施される見通しとなった。だが昭和恐慌、財政難、それに太平洋戦争という激流の中で戦前にあつては、計画はついに消えてしまった。昭和13年、市長に大口喜六が就任した。しかし、大口は代議士であったため、市政に専念できなかった。そこで、重要となる助役問題では実務・同志両派の話し合いで、寿市郎を推すことに決した。続いて大口市長辞職後5か月を経て寿市郎の市長昇格が決定した。太平洋戦争開戦前夜の昭和16年4月であった。

戦後、彼は豊川用水土地改良事業などに尽力し、昭和21年市功労者、次いで28年地方自治功労者、30年名誉市民となった。「近寿の三大ホラ」のうち、豊橋港の修築は戦前に計画立案されたが、実行完成に至らず敗戦を迎えた。戦後になってこの三大事業はすべて計画実施されて完成したことにより、寿市郎の先見性の実証される。豊川用水の完成見ずに、昭和35年4月14日に没した。享年89歳。寿市郎の銅像が豊橋市内赤岩山頂に豊橋港方面を向いて立っている。

(つづく)



近藤寿市郎像(豊橋市の赤岩山頂)

荒れ地から農地へ、  
そして日本一の農業生産地へ

グラビア  
とよがわようすい  
豊川用水  
toyogawa Canal



てんぼくぼら  
荒れ地天伯原 (昭和初期)



産出額日本一のおおば  
(豊橋市)



日本一のキク(電照菊)  
(田原市赤羽根町)



全国上位のキャベツ  
(田原市六連町)



日本有数のみかん  
(蒲郡市)

